
月 刊

MAROAD

Vol.174



2022.06.26

詩と評論

月刊「Maroad」

Vol.174.2022.6.26

「月刊Maroad」編集部

詩・俳句

ウラル俯瞰が忘れられない 詠 (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 4

プラネタリウム (俳句) ……………乾佐伎 5

泥 ……………中嶋康雄 10

よどみに浮かぶ/介護しながら ……………野口裕 11

夢のハワイイ航路 ……………いなだ豆乃助 12

漆黒の函の上 ……………大橋愛由等 15

深夜二時に永遠に眠っているDからの滝しぶきが飛んでくる ……………富岡和秀 16

風味ソネット ……………大西隆志 18

ART NOTE

珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室) ⑥……………はらだてつろう 19

連載小説

『マルクスの場合』—「犬の系譜」④クマ ……………諸井学 6

17回目/「海猫堂店仕舞記」……………千田卓介 7

連載 評論・エッセイ

創造力の彼方へ〈13〉……………大西隆志 3

ヨーロッパ一人旅 序章……………モス堀渕敬子 8

レガートな日々〈2〉……………原田ひでよ 9

極西と極北のコラボ……………大橋愛由等 13

益田っこ通信〈97〉〈98〉……………元正章 14

神戸詞あしび〈161〉「ずっと隣人であり続けた在日朝鮮人の人たちのこと」……………大橋愛由等 20

編集部だより★96/ちかごろ、「Mélange」例会に二人のクラシック・ピアニストが参加してくれている。その二人から大いに刺激を受けている。そこでふと、わたしの音楽履歴を振り返ってみたいと思うようになった。中学三年生のころからジャズを聞いている。高校の三年間は〈ジャズ・読書・愛猫〉の三項目中心の生活を送っていた。ジャズにのめり込む前は、フォークソングを聞いていた。1970年代前半は関西フォークの全盛期。通っていた中学校の近くにあった関西学院大学の学生が奏でるフォークソングの生演奏を熱心に聞いていたのである。それが中学三年になると、言葉つきの音楽を拒絶するようになるのよ」と適切な表現で分析している。そういうものか。ジャズ、すなわちインストルメンタルの音楽世界に酔いしれるようになった(ジャズ・ボーカは忌避していた)高校の三年間。コルトレーンのサクソフーンや、セシルテラーのピアノが、わたしにとって雄弁な「コトバ」だったのである。大学生になると、バンドを組んでのめりこんでいく(担当楽器はウッドベース)。しかし実演者としてのわたしは才能がとぼしく、かつ所属した軽音楽部はレベルが高かったため、三回生になるころ、クラブ活動をやめ、読書の世界に分け入るようになった。学内でわたしの居場所は、軽音楽部の部室から図書館に移っていった。ジャズはもっぱら聞く立場になっていた。京都の四畳半の下宿にオーディオセットを持ち込み、スチール製の本棚とオーディオセットとLPレコードで、部屋は満たされていた。その時はもっぱらジャズを聞いていたが、クラシックとの出会いもあった。その中で擦り切れるほど聴き込んだ一枚のレコードがある。ウラディミール・アシュケナーズ演奏の「ベートーヴェン・ピアノソナタ7番」である。この楽曲はわたしの20歳台の若さと勢いそのものの調べであった。(大橋愛由等)

ぼくも関わっている映画鑑賞団体「姫路シネマクラブ」の総会が三年ぶりに対面で開かれた。新型コロナウイルス感染のパンデミックにより翻弄され続けたが、今回は総会イベントも行うことができた。『サイレント映画とピアノ生演奏の集い』と題したイベントで、楽士の鳥飼りようさんによる貴重な「映画上映+音楽の生演奏」を体験することになった。映画が誕生したのは一八九五年で、最初の約三十年間はフィルムに音声を記録する音声トラックの技術がなかったために、サイレント映画や無声映画と呼ばれていた。日本ではフィルム上映に際しては活動写真真弁士の語り、それにバンドなどの生演奏が主流だが、欧米ではフィルム上映に生演奏がメイン。活動弁士による語りとかはなく、カットタイトル字幕による台詞・ト書きで表現していた。

さて、今回のサイレント映画は「映画の父」と呼ばれるD・W・グリフィスの『迷惑帽子』、『不変の海』、それに喜劇王バスター・キートンの『キートンの文化生活一週間』の三本。映画上映と鳥飼りようさんのピアノ生演奏から感じたのは、映像の動きに音楽が自然のように流れていて、音楽を主張するのではな

大西隆志 想像力の彼方へ 〈13〉

からラジオ・ドラマはあまり制作されなくなり、高校生の頃から深夜放送を聴くようになり、あらためてラジオ・ドラマの面白さに注目した次第。視覚が欠けていることで、音の世界の豊かさを面白いと感じた。想像力が刺激されていた。それにしても「見えない劇場」は不思議な試みだったように思う。あえてラジオ・ドラマを映画を見るように聴く遊びのような会、そしてヘラヘラ十八番館の試みは、そこに集まってくる個々人が熱を帯びていたように思う。片山紀彦さんのオーブンリールに録音されたコレクションによるラジオ・ドラマ。当時はレコード鑑賞会もあった時代だったが、個人の領域での嗜好となりつつあり、経済的にも豊かになりテレビジョン、ステレオ装置なども各家庭に普及し、街頭テレビのように多数が共通の空間を囲むこともなくなっていった。豊かさへの幻影を人々が追いかけ出した高度経済成長期にもあたり、マスメディアではない、ミニコミュニケーションとして、誰でもが小さな発信をやるヘラヘラ十八番館は二十歳前後のぼくには加古川から姫路へ向かう理由だった。

代から一九六〇年代には、若い詩人たちによる実験的な作品が多くあり、視覚が欠落していることで言葉と音の関係がくつきり見えるとともに、詩の生まれる現場感が生まれているように思う。そこには、鳥飼りようさんの音作りのような自在が見受けられる。ヘラヘラ十八番館の見えない劇場の関連で、詩人の伊藤海彦さんを知った。放送詩劇という分野で活躍され、イタリヤ賞のグランプリの『言葉と音楽のための三つの形象』もあり、ぼくには個人的にお世話になっている詩人の安水稔和さんの作品『ニッポニア・ニッポン』も素晴らしい作品なので音源を公開してほしい。反時代的だが、サイバースペースの一種であるメタバースとは逆の方向ではあるが、欠落を逆転させて個々人の想像力を発揮させるための試みも面白いと思う。『ラジオ・ドラマ』音と沈黙の幻想』というLPレコード七枚が入ったカートン・ボックスを所蔵していて、別冊解説書が付いている。そのなかの作曲家林光の文書に、「なにか足りない思った個所へ、ナレーションなりピアノなりを即興で入れると言い、私はそのようにした。私にとつては、はじめてのドラマ出演だから、かたくなつてNGをよけい出したが、とにかくナレーションもピアノも、すべてを即興でやり、台本も楽譜もなしの仕事だったのであった」と。いやはや、楽士の鳥飼りようさんとなつていった。なにか足りないことや、ある種の欠損は詩には大切なミューズのように感じている。

く、音のない動く映像から自然に浮き上がってくる想像上の音、または言葉を指し示しているように思えた。それは映像に寄り添う即興によるピアノの演奏からの届け物のようではないのか。楽譜をなぞることではなく、予定調和ではない即興の自由さにより、映画に込められた一齣一齣の俳優の動きや光景への、一瞬がなされる想像力への魅力を伝えていく。聴覚のなかで欠けている言葉をのせる声の不在を意識させてくれた。そこには音楽としての強い主張がないからではないか。

それは、今から四十年前以上に前に姫路カトリック教会ザビエル堂で行っていた「ヘラヘラ十八番館」での催しでもあった「見えない劇場・ラジオドラマをきく」につながっている。見えない劇場とは素晴らしい命名だと思う。見えるテレビ・ドラマではなく、ラジオから流れてくる言葉と音楽、効果音によるドラマ。テレビジョンの普及していない時代は、活字を除けばラジオ放送が情報を受け取る入口で、ニュースや娯楽の主流だった。テレビが普及していない一九五〇年代から一九六〇年代までが、放送文化の重要なコンテックスだったが、僕が中学生の頃

◆ウラル俯瞰が忘れられない詠

岩脇リーベル豊美

蟻の右往左往を愉しむのか統治者
襲撃より百番目の夜に雹を聞く
どん底をより深く掘れ坑道埋めて
千の鳥さえずり悲嘆するか
の哲学者
夏の備蓄 電力と銃弾と愛と
同調圧力に反して選ぶさくらんぼ
わたくしの芯をすり抜け同調圧力
白い山脈が曳く空の果て
割れ鐘や最期の抱擁ナラティヴ

◆プラネタリウム

乾 佐伎

さよならを眺めています雲だけが
星がまた逃げるプラネタリウムから
遠い日のわたしがいます菜の花に
まず今日を愛せるようにミモザ咲く
不器用がわたしの取り柄重咲く

◆『マルクスの場合』―「犬の系譜」④クマ

諸井学

浜辺から防波堤へ歩いて行くとクマも後をついてきた。石を組んだ突堤が五十メートルほど海に向かって突き出ている。浜辺と反対側がエビス台と言われ、小学生のころ泳ぐ練習をしたところだ。突堤を歩いて行くと、フナ虫が足元をさざめくように退いて行く。

クマはときどき石のつなぎ目の隙間へ鼻を入れる。蟹でも見つけたのだろうか。わたしと距離が離れると、走って追ってきた。

突堤の先端にコンクリートの四角い台があつて、その縁に脚をぶらぶらさせるように座つた。クマもわたしの隣に賢く座つた。わたしはクマの横腹を右手でさすりながら海を眺めた。前に小さな鳥があり、その向こうを貨物船が行き来している。エンジン音が海全体に鳴り響いている。

ぼんやりと海を眺める。海は穏やかなときもあれば、風が強くて波がしらが白く泡立つときもある。穏やかな日は空気が淀んで海と空の境目が霞んでいた。風の強い日は遠く四国まで見通せるのだ。西の方の砂浜がせり出したところに地蔵堂があり、そのあたりの海を地蔵沖と呼ばれていた。中学生になると、この防波堤から地蔵沖まで泳いで行つた。遊泳禁止区域だつたけど、だれも気にしないし、咎められもしない。逆に大人になつた勲章のようなものだった。その地蔵沖の向こうに夕陽が沈んでいく。赤く膨れた夕陽が黒い雲の間から顔を覗かせ、雲を背景に様々な模様を描いて沈んでゆく。

ある日、天啓のように夕陽の美しさに心を打たれた。昼間厳しく照り輝いていた太陽が、西の海に沈むころには熟んだように赤く膨れ、周囲の空を紅く染めながら海に沈んでいく。今まで何度も見たはずの景色なのに、その日初めて心を震わされる経験をした。それはまるでわたしの心の中から湧き出てきたような思いだった。

それからわたしはその夕陽を求めて海に行くようになった。

太陽は毎度赤く熟れて海に沈むのではなかった。おそらく天候、空気の状態によるのだろう。夕陽によつて描かれる空の模様は様々に変化する。沈む夕陽の姿は様々で、雲のかたちも変化に富んで、毎日同じ姿ではなかった。時には素晴らしい夕焼けが夜空をキャンパスにして描かれることがある。そんな見事な夕焼けを飽くことなく眺めていると、不思議な思いがこみ上げてきた。それは初めて心震えた経験したときに通底していた。

いつか、どこかで、見たことがある……。遠いむかし……。どこかで……。思い出せない……。わたしを呼ぶ声が聞こえる……

(つづく)

海猫堂店仕舞記 ⑩

千田草介

月照寺へと足をむけてやってきた謎の男に「あんただれや？」とミロクさんがたずねると、土星の輪つかのようなハットのツバをもちあげて「ハーヴァードといいます」と男はこたえた。

ミロクさんはなにか遠い記憶がよみがえつたらしくかつた。「ハーヴァード氏の月世界旅行……むかし友人のオットー君と、そんな話をしたことがある。それにしても、その月を勝手にポツポツナイナイしてしまうとは、なんの権利があつてそんな不埒千万なことをする」

私は私で、べつのことを思い出していた。大阪万博の人気パビリオン〈アメリカ館〉の最大の呼び物は、アポロ11号が持ち帰ってきた〈月の石〉であつたが、その周囲だつたか通路だつたか、一面にダンボール素材のようなもので設けられた落書きスペースがあり、ちよつと漫画の心得のある者が画いたとおぼしい〈月の石を盗んだ男〉というキャプション付きの絵があつた。ニタツと笑つた顔といい、いま現われた男にピタリとイメージがかさなるのである。

私の思考を読み取つたのか、ハーヴァード氏がうなずいた。「そうです。月をも自由にできるわたしに盗めないものはない。あなたがた、この目の前のプラネタリウムから星を採

りにきたのでしよう。わたしがその盗みを請け負つてもよろしゅうござんすよ」

そのとき私の足元にキジトラ模様の球体がころがってきつた。私はなにかば無意識的に「毬は蹴りたし毬はあり……と口ずさんでそれをぼんと蹴つた。「にゃん！」と猫の悲鳴がして球体は三毛模様のべつの球体にぶつかった。そうしてピリヤード状に衝突の連鎖がおこるとともに、境内全体が猫の悲鳴の合唱で満ち満ちた。「ネコちゃんたち、どうしたの！」〈ピンク〉の叫びがかさなつた。

「〈子午線〉ばかり食べさせたからとちがうかな」何の根拠もないが、なんとなくそんな気がした。「カツオ節削りに味噌汁のぶっかけメシ、純正〈猫まんま〉を食わせたら正常にもどると思うな」

〈ピンク〉にはしかし、私が言ったことより、ハーヴァード氏の言葉が耳にひつかつたようだ。「星泥棒なの、あなたも！」

「ハーヴァードさん」チャンドラが言った。「盗みを横行させては経済が成り立ちまへんがな」

「おや、猫さんからそんな非難をされるとは心外なことですな」ハーヴァード氏はタバコを足元におとして踏み消した。

「猫さんは泥棒については免責でしょう、社会通念上」チャンドラは胸を張つた。「こう見えても商売してますからな」

(つづく)

1982年の夏ヨーロッパをひとり旅してから今年で40年になる。早いものだ。

20歳代半ばだった私も還暦を過ぎた。もうあの頃のような気力も体力もない。

当時英会話サークルに入っていたが、ちつとも上達しないし、思ったような仕事にも就かずに行き詰まっていたので、思いきって海外へ出ることにした。

一カ月間のホームステイ先はイギリスにし、ノルウェーのオスロに友達がいるというのもあつてその後の一カ月間、ヨーロッパをひとり旅することにした。アメリカを女ひとり旅するのは危険だと判断したし、アメリカに行く友だちが多かったので、同じことはしたくないというものあつた。

さいわいイギリス留学に詳しい神戸の旅行会社を紹介してもらい、その会社が提携している学校の中でも日本人が少ないスコットランドのエディンバラを選んだ。スタッフ

のひとりだが、「僕はいろいろ世界中を回ったけれど、ノルウェーとスコットランドが一番よかった。自然が残っているかんじがする」と言ってくれたのも心強かった。

「観たい映画があると一人でもサッサと観に行く」と言うのと、別のスタッフから「日本にはあまりいないタイプね」と言われた。

ヨーロッパを列車で廻れるユーレイルパスと、イギリスを列車で廻れるブリットレイルパスを購入し、時間はかかるが料金の安い南回りの航空便を選んだ。

オスロでは友達の家泊めてもらうが、あとはユースホステルなど安く泊まれる宿を自分で手配しないといけない。一日の予算を決めてやりくりする必要もある。

こうして二カ月間の私の夏の冒険が始まったが、『地球の歩き方』というひとり旅向けの本があると知ったのは、帰国してからのことだった。

レガートな日々② 原田ひでよ

遅れてきた自己紹介 序文にかえて

先月、追悼という思いがけない形であたふたと連載をスタートしてしまい、「誰じゃ、素性を明らかにせよ」「ヤナーチェク？ スケルツォ？ 注訳が足らん」とお思いの方々もいらつしやるかと。

数か月前、兵庫県現代詩協会にたどり着き「秋までに詩をひとつ。その前にパソコンを覚えなくっちゃ」などのんきに構えていた私が、あれよあれよという間に圧倒的な才能とエネルギーを持つ方々の大きな渦に巻き込まれ、自分自身が根こそぎひっくり返るような事態が起きています。見たこともない言葉や文字の洪水。読める気がしない課題図書。そして初挑戦のエッセイ。もう頭の中はどんがらがっちゃん。

このところ、朝は「ゲンダイシー ゲンダイシー」という鳥の声で目が覚めるし、道を歩けば、いつも出会う猫が時々振り返っては「マロウド マロウド」と鳴くのです。

こんな調子で、目の前のコンサートの方は大丈夫なのかしらん。
申し遅れましたが、私はピアノ弾き。来月(7月)には、小さなギャラリーコンサートを控えています。

デビューリサイタルから今に至るまで、基本は

一人で50分から90分のコンサートを企画、演奏し、全ての雑用にも係ります。

今回のような自主公演の場合は、会場探しから集客、フライヤーやプログラムなど紙ものの作成、当日の設営、片付けまで。

主催がついている場合は、営業、交渉、お願いするMCの原稿も全て書きます。演奏活動自体は、生活の糧として成り立つものではなく、あくまでも自分の勉強、ライフワーク、キャリアアップのためであり、副収入になれば御の字、赤字にならないければよしといったところでしょうか。だから、ピアノストの多くは、望むと望まざるに拘わらず、教える仕事に就くこととなります。しかし、業種は細分化され、地続きであるはずの演奏とそれ以外の音楽の仕事もまた、繋がりを持つことは容易ではありません。

コロナ前の数年、オーケストラとコンチェルトを共演、モーツァルトソナタ全曲という大きなソロリサイタルシリーズ、その合間を縫って、地元公民館や他県でのソロコンサートや、アンサンブル、デュオのリサイタルと立て続けに動き、さすがにピアノストの肩書きから逃れられなくなりまし。弾くことも終了間近になった今漸く、少しそれらしい顔をしてやっているわけですが、それまでは「ピアノ教師です。時々弾くこともやっています」とお茶を濁してきました。理由はいつに、ピアノストを名乗るには、いろんなことが少しずつ足りないとという自覚と認識があつたからにはかなりまし。足りないものをなんとか補いたい、替わりになるものはないか、突破口を探してたくさんのお事を試み、そこに自ら患つたりウマチという大きな実

験対象も加わりました。

とても近い将来、ピアノを弾かなくなっても、全ての事を一度ピアノというフィルターを通して見るといふ私の習性は終生変わらないでしょう。(突然出て来たつまらないダジャレは本文と何の関係もありません)。それでも、遠い過去の回想録としてでなく、ピアノを少しでも公に弾いているうちに書きたいという焦燥感がくすぶっています。大切なことをひとつひとつ言葉にしてゆくことで、思いもかけない何かがあぶりだされるのではないかと、見渡せなかつた何かが浮かび上がってくるのではないかと、ほのかな期待を持っています。

タイトルの「レガート」は音楽用語で「なめらかに」を意味します。この楽語は、個人的に私にとって大切なものであり、実際には程遠い人生、日常ではありませんが、レガートであらねば、ありたい、あれ、との願いもこめました。音楽をやる者特有の言い回しや、いわゆる業界用語めいた言葉もできるだけそのまま使つて行こうと思います。(注訳を怠らぬように)

今回は、直前に帯状疱疹に罹つたコンサートの顛末記を中心に。以降は、折々の報告や所感に加えて、楽器や楽譜、作品のこと。ピアノストを悩ませる日々の練習、暗譜、奏法について。切なる想いを持つて取り組んできた導入期の音楽教育、音楽療法。そして、最愛の人モーツァルト。彼に出会うまでの多くの男たちとの遍歴。などなどのラインナップを予定しています。

読んでくださる方々が異端のピアノ弾きの日常や生感、音楽の舞台裏などを覗き見感覚で面白がつてくだされば幸いです。どうぞよろしくお願いたします。

(ピアノスト)

◆泥

中嶋康雄

泥が跳ねる
ズボンが汚れる
顔にも泥がついている
寶石が捨てられている
寶石はもう
産業廃棄物からも生成できる
価値がなくなったものは
数知れず
人の価値も薄れに薄れ
それでも人は食べないわけにもゆかず
ときどきブカブカ浮き上がる
口をパクパクさせている
手をパタパタさせている
からだをクネクネさせている
情報は価値があると世情はいうが
本音
そんなものも欲しくないの
価値もない
個人情報
よくわからないあの法律で守られているのか
ビッグデータ利用により蹂躪されているのか
やっぱよくわからない
泥から人は造られたかもしれないというが
もともとそんなものですらないのだと
訳知り顔で言うけれど
その顔に興味などにもない
誰も見ていないあなたの顔が
どうなっているかが
誰にも関係がない

◆よどみに浮かぶ

野口裕

舌がもつれた
決して嘔んではいけない
水平から三度傾けるはずの舌の平と
縁から二ミリ凹ませる舌の中央は
もくろみ通りだったか
歯裏後方に位置すべき舌先が
空転した

聞いている方にはいわゆる
ろれつが回らない言葉づかいだっただろうが
おかげ様で観客にとがめられもせず
ずんずん話は進められた
もつとも

観客は本当に見ているだけで
聞いていなかったかもしれない
印刷なら場違いにありそうな文字化けの音が
一瞬の遅滞もせずに消え
それに遅れて私のざわめきも消えた
それは話の中身とは無縁に働いて
どこか遠くから私を見つめる
私の視線のようであった

もともとが泥ならば
跳ねた泥がくつついたところで
なにもかもがさらけだされたところで
どうということもない
故郷の市が地方自治法の定めに従い
来年度なくなるとい
もう人がいないという
外国人労働者を追い出すと
無人になつてしまったので
法律によりそうなるという
自称する最後の市長は外国人で
追い出されてしまったので
市の人工知能システムが
人工知能市議会をバーチャルで招集し
市の死を

詩的にも事務的にもお好みで
どうぞ
とメッセージして
シャットダウンする年度末午後十二時が
もうすぐ
雨が降り
あちこちの暗闇の駐車場の割れ目から
ぼうぼうとみつともないだけの雑草が生え
完全自動運転システムの車がとまると
みつともないだけの茎が伸び巻きつき
茎から無数の黄緑のやつぱりみつともないだけの吸盤があらわれ
車体もろともなにもかも三秒以内に
上空のドローンも一瞬で
くさい
煙が漂う
だけ
まだ
ネット上に市の観光誘致の情報ちらほら
「日本一美しいまち」

◆介護しながら

野口裕

対象は今まどろみの中
朝食後の二度寝だ
目覚めたなら色々と押し寄せてくるが
とりあえずこちらも休憩

さて何か書けるかな？
五七五はどうだろう
季語はゴキブリ
さつき掃除機に吸い込んだ乾ききつたやつ

しかし後が続かない
つけっぱなしのテレビから流れる
砲弾のせいでもなからうに

つけっぱなしと言え
冷房ももつたいたいことではあるが
対象の体調が優先だ
冷房も季語になるが
ううん何も出てこない

ちよつと頭がまとまらないときに電話がある
貴金屬買い取り？

そんなもんあるかいな
こつちに来る？
手伝ってくれるんか？
サービス料なんぼ？
はいさよなら
ああ起きたんか
トイレ？
ゆつくり立とうな
どっこいしょ

極北と極西のコラボ フラメンコカンテと津軽三味線



大橋愛由等

★一年で60回ほど、フラメンコの舞台をタブラオの側として接している。グルーポ間のレベルの差は著しい。上質な舞台を展開するグルーポは、リハーサル時からすでに緊張感にあふれているのでリハーサルの様子を見れば、その日の舞台の出来がわかる。いつまでたっても上達しないバイレやグルーポもある。不思議なもので、踊りつづけるバイレの中には、ある時の舞台から突然鬼神が舞い降りたかのように、神に憑かれた巫女のごとく舞い、上達していくひとがいる。そうした飛躍は約一年間つづく。残念だが、そののちピタリと鬼神が去っていくバイレがほとんどである。★関西のバイレたちは数は多いが「上級者、と認識できるバイレの数は多くない。つまり「中級者、と判定するバイレたちはあまたいるが、そのひとたちが「上級者、になりうるかどうかの壁は薄い。では「上級者、はどんなバイレなのかひとことで表現するのは難しい。フラメンコという芯がそのバイレの中に確固として根付いているかどうか—と言っておこうか。★フラメンコはスペイン・アンダルシアという極西に住むヒターノ、ヒターナたちが生活芸能として生み出し、やがて舞台芸能に発展していった。いまでも彼らの中に生活芸能としての残滓は感じられる。その魅力に惹かれたのが、極東の日本人だというのは興味深い。フラメンコは本場スペイン以外では日本が一番盛んと言われ、国内にはフラメンコ専門のプロたちも少なからずいる。★6月18日(土)のことである。毎月第三土曜日に出演しているカンタオールの Jesús Fajardo (ヘスス・ファハルド/写真左) が面白い試みをした。彌月大治(写真右)の津軽三味線とコラボしたのである。これがみごとにはまっていた。このような組み合わせはわたしにとっても初体験であった。心震える体験であったことを告白しておこう。もちろん大治はフラメンコギタリストでもあるので、カンテとの間合いは熟知しているのだが。

◆夢のハワイイ航路

いなだ豆乃助

念願であったハワイイゆき航路のチケットが手に入ったものですから早速皆さまへお別れの手紙を送らねばとも思いましたがそれは置いてそれよりも庭の植物たちとお別れをせねばなりません。それは非常につらいことです。お別れの方法として考えられるのは枯れるに任せておくことかガソリンをかけて火を点けるかの二択ですが美しさではどちらも甲乙つけがたいので悩みます。ただわたしは出不精なのでガソリンスタンドへゆくのが億劫ですしそもそもガソリンを入れる容器を持っておりません。それで燃やすのはやめることにしました。これで取り急ぎ問題は解決しましたが問題はまだまだあります。わたしはパスポートを持っていないのです。と云うのも戸籍がないのです。今はやりの世界市民とでも云うのでしょうか。何故ないのか意味不明ですがないものは無いのです。仕方ありません。諦めましょうでは済みません。わたしはハワイイへゆきたいのです。ではどうするか偽造です偽造。偽物をつくるのです。どうせこの世は誰かの見た夢謂わば偽物なのですからパスポート位でガタガタ云うようでは立派な社会人になれません。

と云う訳でわたしはいま航海の途中であります。風が心地よいのは云うまでもありません。ハワイイと云うのもきつと偽物なのでしょう。ピニルシートで造られた海に身を投げる姿を想像しながらわたしはハワイイア音楽に耳を傾けます。まだ見ぬハワイイの地を前にして。

◆益田つこ通信 97号

元正章（日本基督教団益田教会牧師）

▼ロシア、ウクライナの人民に告ぐ

（2022年6月（パートX）最終章）

「空の空 空の空、一切は空である。（中略）すでにあったことはこれからもあり、すでに行われたことはこれからも行われる。」（コヘルトの言葉「空」は聖書協会共同訳）
「人の子らは空しいもの。人の子らは欺くもの。共に秤にかけても、息よりも軽い。暴力に依存するな。搾取を空しく誇るな。力が力を生むことに心を奪われるな。」（詩編62:10-11 新共同訳）
ウクライナ戦争も、はや3ヶ月以上と経ち、いま何よりも必要なのは「武器、武器」と公言している限り、これからは収まる傾向はない。「益田つこ」もこの件を扱って10回となる。いつか、どこかでこの戦争も終わるのではあるが、ここらで筆を擱くことにしたい。

19世紀末、帝政ロシアを倒すために、「ヴ・ナロード（人民の中へ）」という運動が起こり、ロシア革命へと繋がった。「ヴ・ナロード」掲げる理想はすばらしかったが、余りにも青臭い観念論でもあったがために、テロリズムにと過激化した。ロシア革命の鬼子でもあるスターリン、プーチンもその強権を欲しいままに乱用し、戦争というテロリズムに走ることで、人民を巻き添えにした。「ウラー（万歳）」と叫んで、「愛国無罪」の免罪符を得ようとした。その結果、どうであったか。虐殺を繰り返して、多くの犠牲者を生んだ。「戦争と平和」その絶え間ない繰り返しを、人類の歴史は証明している。だから、両国の人民に告ぐ。「祈るのだ、祈るのだ。」あなたたち当事者の平和への祈りこそが、この忌まわしい戦争を終結させることができる。

◆益田つこ通信 98号

元正章（日本基督教団益田教会牧師）

▼ほう、そうかねえ。そう、しんちやい

（2022年6月半ば）

「ひまわりの庭」これは、9月3日（土）教会でオープンする予定の「認知症カフェ」の名称。昨年暮れから構想を抱き、今年度の教会総会にて教会行事として承認を受け、今までに2回のスタッフ会を開く中で、決定しました。準備期間中、できるだけ多くの方に声をかけ、協力支援を求めたところ、その返事がおおむね「ほう、そうかねえ。そう、しんちやい」でした。反対されることはないとはいえ、「ほん」とにやるの、できるの」と疑心暗鬼にさせるのを常としていました。中には「あなたはどこまで認知症のことを理解しているの」と難詰されることもありました。

思い返せば、今まで仕事以外に「ボランティアの鬼」と自称したくなるほどに、どれだけ様々なことに呆れるほど関わったことか。今回の「認知症カフェ」は、最後の試みとなろう。自分自身が高齢者となり、「老い」をどのように生きていくのか、身体はポンコツ車となっても、心はいつまでも若く、豊かに保ちたいというのが、そもそもの動機である。「老い」は決してマイナス評価ではなく、深みと味わいであってほしい。その意味で「認知症」も然りなのだ。まったく身近で、日常的な問題だけに、太陽に向かって明るく、爽やかに輝いてほしい。ひまわりのように。

「一人は万人のために、万人は一人のために」コープこうべのスローガンが浮かんできました。ほんとに何事も一人では出来なかったし、実際一人になってしまうようでは、大概失敗に終わっていました。あんな人が言っていたつけ。「人生の帳尻は大体みんな不思議にもプラマイゼロ」となって終わるのよ。「人は生きてきたように、死んでいく」まで。

◆漆黒の函の上

大橋愛由等

そろそろ佳いかもしれない
隠れている昼の三角たちを思慕し
不機嫌な月をなだめながら
椅子をすこし引く
ほんのすこし
ギイツという音
遠いどこかの
世界が軋んでいるのだろう
どこかの時空が
弛緩しているのだろう
そのどこかの世界で
少女たちが
クチナシを選別する
悲しい垂直か
無残な硬直か

少女たちは嘔う
三叉路を永遠にさ迷う
徘徊老人たちを
無風ゆえこころと言葉が枯渇した
憐れな無比な詩人たちを
わたしは
敗北の数を
二頭のアゲハチョウが
負の領域にむかっていた
その朝も
夏が躓いて
二丁目の角でないている
木曜日にも
開かない漆黒の
函の上にならべ
敗北がいつ世界に
流出するのか
その時に漏れ出す言葉が
鞘晦のはてに
自壊にすすみ
石たちをいらだたせ
ヒヨドリたちが番を解消し

山風と海風が
あらがいの果てに
白と夏とを拒もうとしている
そんなときに
世界が不変と思われた
コード進行をやめたとすれば
わたしはテーブルの上に
敗北とチョコレートクッキー
を嬉々として並べ
くるくるいつまでも回転する
三角に向けて
「ほら遠くから祭り囃子」
と語りかけてみたり
野線だらけの箴言集を
声を出して読んでみたり
函をあけるための呪詞を
思い出していたり
していても
敗北と無残の数はいつこうに
減らないことを
わかっているつもりなのだが

◆深夜二時に永遠に眠っているDからの滝しぶきが飛んでくる

富岡和秀

Duchamp／デュシャンが死ぬ前に作って残していた遺作、「与えられたとせよ 1. 落ちる水。2. 照明用ガス」を、アンドロイドよ、深夜の滝しぶきとともに受領せよ。その意味を解釈するのは批評的な詩学であり解読学的フィロソフィーだ。これが、滝しぶきが深夜、稲妻のように届いたメッセージである。

NYのアトリエでDuchampが八年がかりで作っていた反芸術的芸術作品『彼女の独身者たち』によって裸にされた花嫁、さえもが、一九二三年に未完成のままデュシャン自身によって製作放棄され、二重の透明ガラスの中に未完の美術記号として配置された意味を、アンドロイドよ、知っているだろうか。前衛的な美術記号として二重ガラスの中に意味を潜ませているのだが、解説にはデュシャンが公にした『グリーン・ボックス』に保管された資料と合わせて理解しなければいけないだろう。そのガラスの反美術的領土はカンヴァースに絵の具を塗りこめるドラクロワ以来の網膜美術たる平面の絵画でなく、芸術的思考の先端で考えられた反芸術的な要素を帯びている。しかし網膜美術に対する反芸術だから、というだけではない。単なる美術的パフォーマンスではなく、単なるダダでもない。単なる反伝統的作品作りでもない。反性が屹立しているのだ。それはデュシャンの創造的な精神が反性として超越化しているからだろう。二重ガラスの芸術的領土で幾何学的反美術的な隠喩を現わしているガラス内、幾何学的花嫁が、ガラスの領土から滲出すると想像してみる事が

できるだろう。二重ガラスの中の幾何学的花嫁は「原型樹木」の隠喩のようでもあり、過去の神話へ遡及して古代ローマへ立ち帰るなら、元・樹木神であり、狩猟神であるダイアナに変身すると想像でき、ギリシャ神話の狩猟神アルテミスに変身も可能だろう。ガラスの領土の下半分には幾何学的形象の独身者も描かれているが、なにやらそこにはカフカやアルトーの面影を思い浮かべてもいいようにすら思える。

「彼女の独身者たち・・・」以前に、既成の自転車やシャベルを細工し、ブリコラージュ／bricolage／寄せ集め細工、として提示したように、「レディメイド」の作品群はデュシャンのシュルレアリスムな思考とアイロニーから生まれたのだろう。工業製品のシャベルや自転車を加工した提示品はもはやそれ以前と同じ美ではない。お客／guestと、主人／hostを掛け合わせて host／幽霊、を生み出すような自在な遊戯的精神がそのような反芸術的創造物を指し出せる。考えのなかにあるのは「スラス」である。座る位置を少し「ずらす」とその僅かな隙間に微細な何かが生じる。ズボンがこすれるときに生じる、気に留めなければわからない音からは、二次元から三次元に渡る通路が生まれる、とデュシャンはメモに残す。それを「アンフランマンズ／infrance／極薄」な感覚と書いて重きをおく。これは「ズラス」考えの延長であり、デュシャンの「蝶番」のような思索から出てくるのだろう。創造的思惟の核にある蝶番の表象が「彼女の独身者たち・・・」にも取り入れられているのは「ズラス」への延長上にある蝶番の思索ゆえで、蝶番は可逆的な種類のものだ。

志だ。その先に見えるのは超越的な純粹美であり、純粹觀念の芸術的形態化である。平面のカンヴァースに描く網膜美術への対抗であり、カウターカルチャー的なオブジェの志向であり、強いアイロニーだ。

デュシャンと交流していた音楽家、ジョン・ケージは「マルセルについては何も言うまい」という名のマルセル・デュシャンへの視覚的オマージュと言えるシルクスクリーン&アクリル板で立体オブジェを作って、楽曲も作っているが、ケージの精神はデュシャンに強く共振・共鳴していたのだろう。

アンドロイドは人工人間であり、見ようによつては思考機械に過ぎないのだから、煩雑物を排除した純粹性を保持しうる。この人工人間性自体に、キュビズムを飛び抜けたデュシャンの反芸術的意志に呼応する暗示が存在しないだろうか。

デュシャンは、カンヴァースに絵の具を塗る網膜美術を放棄し、「彼女の独身者たち・・・」を創作して未完成のまま製作放棄したのだが、これに加えて、それ以後、オブジェ的な造形美術の製作すら公にせず、芸術的無為化の兆候を示していた。あたかも詩作の世界から立ち消えてアラブの商人になったランボーのように、デュシャンはチェスに明け暮れ、芸術品製作すら放棄したと思われていた。しかし詩作をシャットアウトして自らの類稀な詩的言語と対立・否定したかのようなランボーと相違して、商人になったわけでもない。フィロソフィックな無関心は精神を自由にする。何ものからも自由になる精神的方法をデュシャンは身に付けていた

フランス・ルーアンで永遠の眠りにについているデュシャンがアンドロイドに、「与えられたとせよ」「落ちる水・・・」と滝しぶきのシグナルを送ってきたのは深夜二時のこと。深夜二時は山野で闇が深まり日常が無化される時刻である。滝しぶきは稲妻のような伝播媒介を意味しており、無化される事態を布告する。無化される深夜の闇のなかで感覚と思考は研ぎ澄まされる。

何故「アンドロイド」という名に対して稲妻のようなシグナルが送られてきたのだろうか。アンドロイドが映像化されてもいる想像上の人工人間であり、思考回路の核心部に空隙があつて生身の身体性を所有していないからだろう。アンドロイドは食の必要性がなく、生産性から解放された人工性を保有している。精神と思考だけの存在として仮構され、その存在根拠が空隙／すきま、であるからで日常の私性を所有することから解放されたれている。生きながら戸解しているようなものだ。デュシャンはそれに相似して、自らの生存の中核にそのような空隙を構え、それを根拠に誠の實在を想定し、反芸術的芸術を創作していたと想像できるのではないか。

目指していたのはデュシャン自ら語るように「灰色の脳髓だけがあらわすことに成功できるような結合、ないし少なくとも表現」である。そのような芸術を求めていたのだが、この言明は觀念美の探究であつて、あくなき實在への不可視の觀念創造への意志であり、不可視の實在の形態を造りだそうという意志である。不可視であるが、實在として有るものへの視覚的代替物、觀念の美。それがデュシャンによる反芸術的芸術の製作意

のだと思われる。時にはダダの精神を生かして、さらにそのダダからもシュルレアリスムな事態からも時に距離を置き、肩の力を抜いて呼吸していた時もあったと思える。いかにも精神の囚われなき自由を志向していたのだろう。そのなかでアイロニーある反芸術的芸術について考えを回転させる。そうして密かにNYで誰にも知られず、「遺作」を芸術的修行者として製作していたのだ。その死後に、遺作「与えられたとせよ 1. 落ちる水。2. 照明用ガス」が出現する。「原型樹林」に喩えられたものは変容しこの喩は不明化しているとも言えるし、あるいは不滅化しているとも言えるだろう。このフレーズ「与えられたとせよ」には「闇のなかで」の言葉が付随している。思索は闇のなかで、という暗示的意味だろう。しかも「水とガス」が与えられたとせよ、というのだから、極めて基礎的な芸術性を湛えている。「落ちる水と照明用ガス」は人間の生存基盤になるものであつて「命の水と光の元」のようだ。「のようだ」という言葉はものごとの本質を伝えうる喩的思考で禪的であり、「のようだ」反芸術的芸術品を遺作としたデュシャンの精神を読み取れる。しかも生存基盤の二つを前衛芸術のオブジェに登場させるといふのはよくよく考えられ、オブジェ的芸術に体系性を忍ばせている。このあたりにアポリネールがデュシャンの芸術は公的になると予告した秘密があるのかもしれない。

あたかも煩雑物を可能な限り取り除き、空隙と虚無を生存と精神の根拠とし美を追求するようだ。まるで禅者の作つていたものかと思える。純粹志向の精神を上級のチェス技能で磨いていたのだとも想える。『イジチュール』を書いてその記述のなかに「虚無が立ち消えたあと、純粹の城が残る」と記して思惟の痕跡を残し

たマラルメと精神は同一であるようだ。だからアンドロイドも煩雑物を出来るだけ少なくして生存し精神を磨くのがよいことは疑いようがない。アンドロイドは、過去からのメッセージを現在と未来の空に舞い戻りさらに開明するため「☆のようだ」応答をデュシャンにするだろう、と精神の核心で思い定める。遺作「与えられたとせよ・・・」はフィラデルフィア美術館で覗き穴から覗きみる形式で見ることによつて実見できる。覗きみると、花嫁の進化したらしい人物とアクア燈と滝が描かれて何事かを示しているが、これは「彼女の独身者たち・・・」の進化ヴァージョンだ。「彼女の独身者たち・・・」と「遺作」の二つの反芸術的製作品への眼差しは、精神の基礎的かつ本源的で、先端的事態への眼差しでなければならない。二つの反芸術的作品には隠喩が記号化されているが、時を超えて、新たに解読学的創造に結びつけることが可能だ。デュシャンが「彼女の独身者たちに・・・」を生み出したのは言語を操る作家ルーセルの影響であつたように、その逆に反芸術的形象物から詩学的言語を生み出すこともある話だ。芸術的創造にとつては何事も可逆的／リバーシブルでよいのだろう。

マルセル・デュシャンからのメッセージと如上の僅かな応答は、アンドロイドから、デュシャンへのオマージュ的言葉を含め、アンドロイド自身が「純粹の城」の構築と開明を目指すために格闘することだろう。デュシャンはこれからも、水と灯りを送ってくる幽霊である。彼のもう一つの名前、ローズ・セラヴィを含んだ作品名を借りて深夜二時に乾杯しよう。『ローズ・セラヴィよ、なぜくしゃみをしない』。

◆風味ソネット

大西隆志

どこにもあつた洋食店や、お好み焼き屋は消え時代のせいにしてしまっているのは思考の甘えなんだろう。ぼくらは転がる石には苔はつかないと嘘ぶり三十歳以上は信用するなと強がっていた

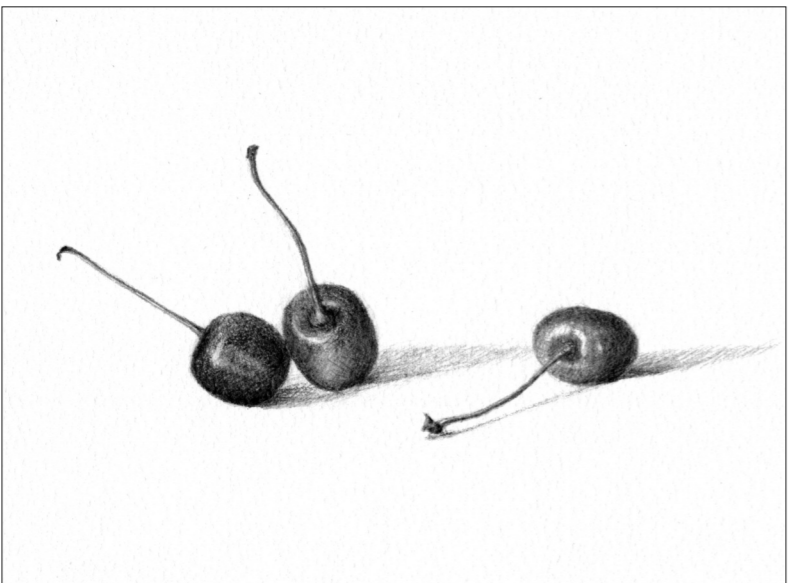
フォークとナイフはデパートの最上階の食堂で使い方を覚えたはず、貧しさを誇りながら緊張している家族はテーブルを囲んで目を見合わせ黙ったままテーブルクロス絵柄を焼付けた

皿にはクロケットが盛られていたのかはつきりとはしないが労働運動はまだまだ元気だった、デモは歩くことだった。恥ずかしそうな拳は揃っていないけれどもよかった

貧しい時代がまたもややって来るように、新たに消え去るのはぼくらは薄々に知っているようなのだ、小さなささやき声の風味。幻だったはずの威勢の良い多数派の甘味料が浮かび上がる

6

珈琲タイムレッスン（大人の絵画教室）



・立方体を描く課題ですが、立方体を表現するものではありません。立方体を使って「…」を表現するのです。

・完成までに時間がかかりましたか？ 時間がかかった分、達成感も得られたことでしょう。それが次への力になります。

○レッスン 2-1 球とさくらんぼ

1 桜桃

・桜桃の季節です。手に入りやすいと思いますので、写実にチャレンジしてみましよう。

・鉛筆デッサンの技法で描きます。

2 桜桃を3個、観察して描く（課題の目標）

・配置を考える。左右2対1、高さ、奥行き（構図）

・背景は描かないで、桜桃の影で台を感じさせましよう。

・影が見えやすいように、白っぽい台の上に置く。

3 注意点（ヒント）

・桜桃の色に目を奪われず、球状の粒にできる陰を見ること。

・桜桃のほそい軸も立体です。

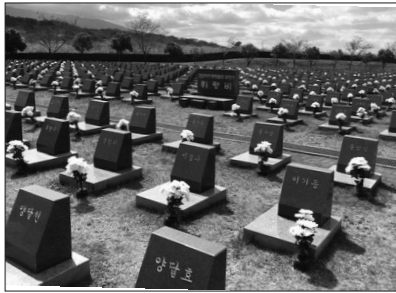
・最初は一個だけ描いてみてください。息切れしないように注意。

・光の方向と陰影を考えて桜桃の写真を数枚撮っておいてください。

はらだてつるう（美術家）

神戸詞あしび

161-2022.06.26 大橋愛由等



韓国・済州島にある
「済州島4・3事件」で
犠牲となったひとたちの墓碑

関西という風土もあるだろう。わたしの周囲には在日朝鮮人のひとたちが、つねに隣人として居た。まず高校時代のことから語ろう。男子校だった。クラスでなんとなく友人となったAくんが、わたしを含めて何人かでAくん宅に呼ばれることになった。郊外の大きな家だった。高校生なのでジュースやケーキなどが出され、たわいな話をしていた。応接間にまねかれ、一番目立つところに、ひとりの肖像写真が掲げられていることを目視する。金日成総書記だった。ここではじめてAくんが在日朝鮮人であることを知る。Aくんの「通名」は、日本人らしい名前だったこともあり気づくことはなかった。金日成総書記の写真の下には何冊かの上製本の著作集が並んでいる。わたしは思わず「チュチェ(主体)思想ですね」とひとりごとのようにつぶやいた。読書人のはしくれであるろうとしていたわたしである。チュチェ思想が北朝鮮の国家を成り立たせるための思想的枢要であることは知っていた。わたしのひとりごとで驚いたのは、Aくんの両親だった。「知ってるの?」「いやちゃんと読んでいませんけど」といった会話を交わした思い出がある。そのときはこうした短い会話だけで終わったと記憶している。Aくんとはその後、彼が在日朝鮮人であったことなど意識することなく友誼を深めていった。もうひとつエピソードを書く。アルバイトの女性を求人誌で募ったときのことである。応募し

ずっと隣人でありつづけた 在日朝鮮人の人たちのこと

前置きが長くなってしまった。6月20日。神戸の元町映画館で映画「スーパとイデオロギー」(ヤン・ヨンヒ監督)を観た。80歳台半

てきた時からその女性は通名でなく本名を名乗ってきた。面接してみると、朝鮮学校出身で、日本の学校にいかず、民族学校に通いつづけていたことを知る。わたしはその時応募してきたひとのなかで、彼女がいちばん活気にあふれるパーソナリティということもあり、採用することにした。わたしには在日韓国・朝鮮人の友人・知人が多く、出版活動でも、在日の詩人で朝鮮民族独自の定型詩「時調」(時調)の作品集を上梓していることなどを、彼女に伝えていた。彼女を採用したのは、前向きな性格ゆえと、在日朝鮮人であることを隠さず堂々と名乗って日本社会に生きていくそのありように共鳴していたことも理由であった。彼女は近年、朝鮮籍であっても西側の英語圏の国に留学できることを素直に喜んでいった。

ばの母(オモニ)は大阪・鶴橋に住んでいる。父(アボジ)が亡くなって一人暮らしをつづけるオモニを心配して、娘で映画監督のヤン・ヨンヒは、東京から様子を見に来る。この一家にはヨンヒの上に三人の兄(オッパ)がいて、全員「帰還事業」のため北朝鮮にわたり生活している(そのうち長男は病没。アボジもオモニも韓国・済州島の出身ながら、朝鮮総聯の組織の一員として活動。オモニも30年間つづけて北朝鮮を訪れ、子どもや孫たちと会っている。もちろん送りも続けている。このオモニ、「済州島4・3事件」(1948年の体験者である。朝鮮半島の南部だけで単独選挙をすすめる事態に反発した済州島の人たちに対して、時の韓国政府は警察隊などを送り込み、島民を無差別に虐殺した。18歳だったオモニは婚約者をなくしている。この事件の故に済州島出身者のなかには韓国政府に根深い不信感を抱くようになり、この梁一家のように総連籍を選択する者もいたのだ。

一誌名変更のお知らせ

ながらく誌名を「月刊 M_élange」としてきましたが、170号から「月刊 MAROAD」に変更しました。これは、「月刊 M_élange」発行当時(2005年)から17年が経過して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨を願うために変更したものです。(大橋愛由等)

2022年06月26日 通巻174号
発行所/月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 660円(税込)